

巻頭言

道具の進化

初夏刊行の号に季節外れな話題で恐縮ながら、スキーの話です。縁のない方はご存じないかも知れませんが、スキー板やブーツなどのスキー道具は常に進化し、ほぼ毎年新モデルがリリースされます。その中でもスキー板の進化は他の道具に比べてとても速く、例えば10数年前の板と最新の板とは長さも形状も大きく異なります。一般ゲレンデ用では、身長よりも長い真っ直ぐなスキー板が、今では'90年代の終わりに現れたカービングスキーに取って代わられました。それはトップとテールが幅広くセンターが狭い、杓文字を引き伸ばしたような形をしたものですが、今ではさらにロッカー[1]の要素が採り入れられ、先端の反りが大きくなったものが主流になりつつあります。

厄介なもので、スキー板が進化して形状が変化すると、乗る側も板の特性に合った滑り方に変える必要があります。滑り方を変えずに新しい板に乗ろうとすると、板の性能を引き出せないだけでなく、暴走したりターン中に転倒したりする恐れがあります。とは言うものの、多くのスキーヤーは自分が全盛期に確立したスタイルからなかなか抜け出せず、新しい板に苦戦する様をしばしば見受けられます。

私の知人に、数名のベテランスキーヤーがいます。彼らの多くはとうに還暦を過ぎ、古希に届いた方もおられるシニアスキーヤー達ですが、歳に似合わず端正なフォームと結構なスピードでゲレンデを疾走されます。その年齢までスキーを楽しむ秘訣を問えば、まずはオフシーズンの体力作り、加えて道具の進化を常にチェックし、それに適した滑り方を実践すること、と答えます。見れば確かに、彼らは若い頃に培ったスタイルに固執することなく、新しい板に乗る時はその板の特性を研究し、重心移動のタイミングや腰・膝の使い方を見極めながら、その板に対して最も効率の良い滑りを追求します。さらに、プロデモンストレーターの最新の滑りをビデオから学び、専門誌も欠かさずチェックしています。

この大先輩達の姿勢を見るにつけ、道具の進化に対応する柔軟性と、道具を生かすための努力がいかに重要か、再認識させられます。これは、我々分析技術者にとって最も重要な道具である分析装置でも同じではないかと思えます。分析装置はスキー板ほど頻繁なモデルの更新はありませんが、メーカーは常に研究開発を重ね、マイナーチェンジを繰り返しています。スキーとは違って分析装置は、進化してもその性能を容易に引き出すことができるように設計されており、正しく操作すれば誰でも最高性能が得られます。しかし、古いスタイルに固執した分析を行っている、新しい機能が生かせない場合もあります。長らく当たり前のように使ってきた測定条件には、無駄もあれば、データの質の向上につながる改善の余地もあると思えます。私自身、新しい機能を試す際は、測定条件や試料調整方法を見直すよう心がけているつもりですが、果たしてどこまで実践できているやら、怪しいものです。

補足になりますが、先述の大先輩達はスキー板のメンテナンスを毎日欠かしません。滑走後には古いワックスを落とし、翌日の気温に適合したワックスを融かし込み、ブラッシングを行って滑走面を整えます。言わずもがな彼らの道具は、常に最高の性能を発揮します。

[1] 例えば、スキーセレクション 2013, スキージャーナル出版 (2012) ISBN 978-4789962087